

漢法苞徳塾資料	No. 114
区分	疾病論・病因
タイトル	積聚の問題を廻って
著者	八木素萌
作成日	1991.07.20

1. 「五十六難」の記述を見ると、「積聚」特に「積」は「外感病」が「痼疾化」したものと認識して良いように思われる。

例えば「…肝之積名曰肥氣……以季夏戊己日得之……肺病伝于肝 肝当伝脾 脾季夏適王王者不受邪肝復欲還肺 肺不肯受 故留結為積 故知肥氣以季夏戊己日得之…」とあるが、「心」も「脾」も「肺」も「腎」も同じ構造の論で説明している。四季の推移の順から見れば「春→夏→季夏→秋→冬」であるから、「…以季夏戊己日得之…」と言うのは「肝・木」の旺気する「春」の「次の次」に当たる「季夏・土」の時期の「戊己日」つまり「十干」では「土」に配当されている日に、「肺」が「邪」を受けたと言うのである。

「肺」は「季夏の次の季節に旺気する」のである。故に「旺・相・死・囚・休」の循環論に当てはめて見れば、「肝」は「囚」期に当たり「肺」は「相」期に相当している。「脾」は「旺気」の時期に相当しているが、「季節」も「十干の日柄」も「土」に相当する。つまり、自然における「土気」が最も盛んな時期に相当している。これが「邪」となる場合は、「土の気」の外感以外に有り得るであろうか？この「土気」の「邪」に対して「相」期に位置している「肺」が冒されたと言う状況である。

季節の「土の気」とは具体的には「湿」であり、この「湿」は季節の蒸鬱しやすい「熱」（＝立ち籠める状態にある熱）を内に含んだものに他ならない。これは「五十八難」に言う「湿温」に他ならない。つまり「肺」〈相期〉の「湿温」病という「邪気実」が「肝」〈囚期〉に及んでいる状態であるが、「脾」が最も「旺気」する時期の、「外気」の「土気」も最強の状態にある「邪気」によって、「肺の湿温」病が起こったのである。この「肺」の病の「湿温」の影響が「肝」に及んだのである。

つまり「肝」は「賊邪」としての「湿温」（土邪は本来は微邪であるが、この病因としての湿熱を「“賊”の位相」＝「肺」から受けたのであるから）病因に冒されているのである。このことは「肝」が異常に弱い状態であるから「邪」を「脾」に転化することが出来なかった。そうであるから「留結」して「積」になるのだ。つまり「補肝する事と湿熱を瀉すことが組み合わせられた治療」が必要になるのである。「肝〈木〉」に対して「{湿} 土」と「{熱} 火」が侮っている状態のようであるが、この「湿熱」の「邪」は「相期」に位置している「肺」の病として体を侵襲している。つまり「肝」の立場から言えば「賊邪」となる「金」と組んで冒して来た、或は「賊邪」の「位相」から冒して来たのである。

「土」が「侮木」している場合ならば「木」が「侮金」している場合と同じ構造であるから「瀉火補水」の原理を回転させて「瀉金補火」でやれるということが、論理的には言えよう。しかし、かようなローテーションが適切であるかどうかは多面的に検討しなければならないと思われる。

2. 七十五難の記述や六十九難の記述との関連性を検討する為に「息賁」（肺積・心受木邪）（春甲乙日受之）と「伏梁」（心積・腎受金邪）（秋庚辛日得之）も「痞氣」（脾積・肝受水邪）（冬壬癸日受之）も「賁豚」（腎積・脾受火邪）（夏丙丁日受之）も検討する必要がある。

五積の論を表にすると別表のようになる。

3. 『素問』六節臟象論第9（清・汪昂の註）と『素問』玉機真藏論第19（王冰の註）と対比して検討すると、「六節臟象論第9」は運氣の「大過」と「不及」の病機論を記述しているが、例えば

- (1) 「木氣」の「大過」の場合には、「侮金」と「乘脾」という「木」の「大過」の状態という病機が表現され、「金」も「土」も病むというのである。「木」の「瀉」のみでは不足になら無いか？「火」も「瀉」すべきでは無いか？「金」と「土」とは俱に「補」すべきか？「土」の「補」のみで足りるのではないか？
- (2) 「不及」の場合には「木制」の無い「土」は妄行して「水」臟＝「腎」に病を生じさせ、「金」の「賊」剋を「木臟」＝「肝」が受ける事になる。それは益々「土」に対する「木制」を弱めるので「土の妄行」を益々強めるように作用する。これは、まさに「補母瀉子」（69難）そのものである。そうは言っても、直線的では無い、問題を起している「経」を「自経の補瀉」として用いる他に無いのである。「肺・金」の「子経」は「水」であり、「肝・木」の「母経」は「水」であるから「問題の経」を直接に運用する他に無いことになるが、これは「病」んでいる「臟腑経絡」の「腎」そのものにはなっていない点に注意する必要がある。

4. 『内経』中の「積聚」に関する記述は、

『靈枢』百病始生第66、『靈枢』五变第46、『素問』举痛論39、『素問』平人氣象論第18、『靈枢』衛氣第52、『靈枢』邪氣藏府病形第4、『靈枢』経筋第13、『素問』奇病論第47、『素問』腹中論第40、『靈枢』本藏第47、『素問』陰陽別論第7、『靈枢』刺節真邪第75、『素問』大奇論第48、『素問』骨空論第60、『素問』気厥論第37、『素問』玉機真藏論第19、『素問』病能論第46、『素問』厥論第45、『靈枢』上膈第68に散見される。

任应秋は『黄帝内経類析』の「十八・積聚」の中で

- 1) 五積：肥氣、伏梁、息賁、息積、奔豚。
- 2) 瘤：腸瘤、昔瘤。
- 3) 瘕：水瘕、慮瘕、疝瘕。

としている。「内癰」も「積聚」に含めて良いものと思う。

5. 『内経』に見られるこれらの「積聚」に関する病因論的・治療論的な記述は次のようになっている。

☆病因論的記述

☆治療論的記述

難經 5 6 難 五積の病機表

積名	臓	受邪蔵	季節	日時	積状	旺気臓	病候
肥気	肝	肺	季夏	戊己日	左脇下 如覆杯有頭足	脾	発咳逆痞瘧
伏梁	心	腎	秋	庚辛日	起臍上 大如臂上至心下	肺	病煩心
痞気	脾	肝	冬	壬癸日	在胃脘 覆大如盤	腎	四肢不收 発黄疸 飲食不為肌膚
息賁	肺	心	春	甲乙日	右脇下 覆大如杯	肝	洒淅寒熱 喘咳 発肺壅
賁豚	腎	脾	夏	丙丁日	発于少腹 上至心下 若豚状 或上或下無時	心	喘逆 骨痿少気

註（八木）

◇肥気・木積→肺受土邪

◇伏梁・心積→腎受金邪

◇痞気・脾積→肝受水邪

◇息賁・肺積→心受木邪

◇賁豚・腎積→脾受火邪

土邪は、『難経』では「飲食・労倦」；『内経』では「湿邪」

金邪は、『難経』では「傷寒」；『内経』では「燥邪」。

水邪は、『難経』では「湿」；『内経』では「寒」。

木邪は、両書ともに「風」。

火邪は、両書ともに「熱・暑」